OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>徳岡昌克『建築 生き様のデザイン』
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 1999, 38, p. 103-104
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52805
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

徳岡昌克『建築――生き様のデザイン』

彰国社　1998年　160ページ

藤田治彦／大阪大学

小学校時代のことである。体育の時間に雨が降ると，きまって，担任の先生から「何かやれ」と指名され，同級生に話を聞かせていた男の子がいた。担任も話好きだったようで，いつも山本有三の『路傍の石』を生徒たちに聞かせていたという。一方，その少年が，指名のたびに，連続で話をしていたのは『アリババと四十人の盗賊』だったというのがおもしろい。ともに困難を克服していく過程の話なのだが，先生の話は苦難に耐えながらの成長の話，生徒がするのは，困難もあるが，機知をもってそれに立ち向かえば夢のような幸運が開けてゆく話である。第二次世界大戦まじかの大阪。担任の教師は耐えきれなくなった日本で耐え忍ぶ人の姿を子供たちに語り，その少年は知恵と判断で大きく広がる海の向こうの世界を見ていた。

おもしろいというよりも興味深いのは，この雨の日の小学校の光景が，この少年の生涯をすでに予示しているように感じられるからである。ずば抜けて背が高く，足も早かったというから，『アリババと四十人の盗賊』を友達に聞かせてやる話なども総合すれば，まちがいなく学級の兄貴分という感じだろう。これが小学校１年生の時の思い出だというのだから驚く。この少年の名は昌克。そして，ここで紹介するのは『建築――生き様のデザイン』。建築家，徳岡昌克（1930－）の，作品集を兼ねた大判の自伝である。

戦後，若き徳岡氏は京都工業専門学校を首席で卒業し，竹中工務店に入社，さまざまな人々と出会った。その建築家人生にとっては，1965年から67年にかけてのアメリカ留学がとりわけ重要だった。また，アラビアン・ナイト風に書くならば，その「開けごま」は関西大学幼稚園だったのかもしれない。竹中の設計部で担当した作品のひとつであるその幼稚園が幸い『新建築』に取り上げられ，続いて『Japan Architect』『Casabella』『L'Architecture d'Aujourd'hui』と，海外の有力誌に次々と掲載された。アメリカで実務の経験をすることなど非常に難しいあの時代，ワシントンＤＣの建築事務所が35歳の日本人若手建築家を呼び寄せてくれた背景には，そのような幸運にも恵まれた，高い国際的評価があった。

徳岡氏は，仕事の内容に限度のあるワシントンＤＣを離れ，シカゴに移ることになるが，その時の，新しい職場探しの下りが興味深い。ミース・ファン・デル・ローエ，ミノル・ヤマサキ，S.O.M. などの有名建築事務所を，給料などの条件も含めて品定めしながら訪ね歩く話である。『近代建築の目撃者』（佐々木宏編・新建築社）という本があるが，これなどさしずめ「現代建築の目撃者」といったところだろう。氏は結局，Ｃ・Ｆ・マーフィー事務所を選び，1967年の夏に帰国の途につくまで，19世紀末以来の商業建築のメッカであるシカゴで，アメリカでの実務経験を重ねた。

帰国し竹中工務店に復帰，大阪本店設計部設計課長となった。この時期の代表作に《東洋紡績敦賀ナイロン工場事務所》，《信越酢酸ビニール堺工場事務所》，《藤沢薬品工業富士工場ＰＲ館》などがある。ミース・ファン・デル・ローエを想起させる，シカゴ仕込みの本格的な鉄骨構造の建築物である。また，鉄

筋コンクリート造でも新しい試みを行った。ポール・ルドルフを想わせる，縦縞のコーデュロイのように外壁にテクスチュアをつけた《肥塚行雄邸》などである。何れも，日本では最初期に属する試みであった。

以後，多くの秀作を手掛けながら，帰国後16年目の，1983年，大阪本店設計部副部長時代に竹中工務店を辞した。自ら実際のデザインを続けたかったのだが，年令，経歴など，どのような条件をとってみても，デザイン管理職とならなくてはいけない立場になってしまった，というのが理由であったようだ。これ以後の活躍は，意匠学会のパネル展示などでも紹介されているので（また，竹中工務店辞職前後の苦労話などは，『建築 ── 生き様のデザイン』自体を読んでいただきたいので），代表作を年代順に列記するにとどめておきたい。いずれも，堅実な仕事で高い評価をえている。

志賀町民センター（1988）
田川市美術館（1991）
志賀町立図書館（1992）
神戸市立小磯記念美術館（1993）
碓井町立碓井琴平文化館（1996）
稲沢市荻須記念美術館（1996）
豊中市立伝統芸能館（1996）
能登川町総合文化情報センター（1997）

徳岡事務所となってからの作品は独自の作風のもので，アメリカ建築の影響を示すようなものではない。氏あるいは同事務所独特の，また日本独自のものであり，それぞれの建物が生まれた土地のそれぞれの風景に固有のものとなっている。それでも，田川市美術館，荻須記念美術館などで用いられている，大理石の薄板を透過光で見せる手法などに触れると，遥か彼方の遠雷 ── おそらくイエール大学希覯本図書館の内部空間 ── を聞いているような，アメリカ帰りの背の高い建築家の姿が目に浮かぶ。この光のイメージは，徳岡事務所にとって源初的なものであり，近年の美しく変化するオフィスビルのファサードの提案などもこの系譜上に位置付けられる。

まだまだ活躍中の徳岡氏だが，今回，早目に自伝執筆に踏み切ったのは，一日も早く自らの豊富な経験を伝えておきたかったからなのだろう。実は，自伝とはいっても，やはり建築家であるふたりのご令息が聞き手になってのインタビューという，異例の形式をとっている。ご子息を仮の代表としての若い世代への助言集でもあり，例えば，「審判のない喧嘩はするものではない」といった，極めて現実的な後進への助言に満ちている。処世術のようだが，これが単なる処世術でないのは，その言葉が制作への情熱に裏打ちされているからである。努力せよ，そして，その努力を無駄にするな。とはいっても，我慢せよ，いつか芽が出る，といったことではなく，むしろ，能力や努力は正当に評価されるように適切にプレゼンテーションせよ，という，いかにも実務建築家らしい健全かつ建設的な思考がすべての言葉の背後にある。

この後半が作品集となった自伝は ── 失礼な言い方にもなるだろうが ── 建築家，徳岡昌克氏が68歳にして ── 30数年前の渡米のときのように ── 再びつくったポートフォリオであるように思う。語られる内容の純粋さと熱意，そして，本書をステップにまた飛躍しようという若さに満ちているという意味で，それをポートフォリオと呼ぶことが許されるならば。